

『保元物語』の研究：本文の生成・改編・享受の場

著者	阿部 亮太
著者別名	ABE Ryota
その他のタイトル	The Study of “Hogen-Monogatari” : The Text's Place of Generation, Reorganization, and Acceptance
発行年	2020-03-24
学位授与番号	32675甲第470号
学位授与年月日	2020-03-24
学位名	博士(文学)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://doi.org/10.15002/00023024

法政大学審査学位論文の要約

『保元物語』の研究

―本文の生成・改編・享受の場―

阿部 亮太

【目次】

はじめに

第一章 認識としての「保元・平治」

―物語は院政期の動乱をいかに捉え直すか―

第一節 問題の所在

第二節 認識方法の多様性

第三節 軍記三作品における「保元・平治」

第四節 軍記三作品以前における「保元・平治」

第五節 まとめ

第二章 文保本『保元物語』の来歴と生成環境

―「光臺寺」と「法花院」をめぐる―

第一節 問題の所在

第二節 中世の「大和国光台寺」

第三節 「大和国光台寺」の所在地

第四節 文保本と長祿本『剣巻』を取り巻く環境

第五節 「法花院」の所在地

第六節 文保本の来歴と生成環境

第三章 『保元物語』鎌倉本・宝徳本の共通祖本

―両系統本文成立の前提として―

第一節 問題の所在

第二節 共通祖本Xの編纂方針(1)

第三節 共通祖本Xの編纂方針(2)

第四節 共通祖本Xの成立上限

第五節 まとめ

第四章 古活字本『保元物語』編者考

―『塏囊鈔』を用いた評論群を中心に―

第一節 問題の所在

第二節 藤原頼長批評

第三節 源義朝批評

第四節 鳥羽院批評

第五節 古活字本『保元物語』編者考

第五章 天理本『梅松論』と古活字本『保元物語』

―行誉の編集を考える―

第一節 問題の所在

第二節 院政批判に関する記事の検討

第三節 鳥羽院の御遺誠に関する記事の検討

第四節 まとめ

第六章 崇徳関連話群の再検討

―延慶本『平家物語』の編集意図―

第一節 問題の所在

第二節 〈蓮如説話〉と朗詠をめぐる問題

第三節 〈康頼記事〉の検討

第四節 崇徳関連話群と西行

第五節 延慶本の編集意図とその方法

おわりに

初出一覧

【要約】

本論文『保元物語』の研究 ―本文の生成・改編・享受の場― は、『保元物語』十三世紀前半に成立した軍記物語『保元物語』を研究対象とする。以下、【目次】に示した全六章の構成に従って、本論文の概要を説明する。

「はじめに」では、『保元物語』の研究史を概観した上で本論文の目的を述べた。戦後の『保元物語』研究により、本作の諸本はおよそ十系統に分類され、そのうち文保・半井本系統、鎌倉本、京図本系統、金刀比羅本（宝徳本）系統、流布本（古活字本）系統の五系統が重視された。特に古態性を多く保存する文保・半井本系統、室町期に流布した宝徳本系統、江戸期以降流布した古活字本系統の主要三系統を以て、本作の大きな全体像を捉える見方は、現在にも通用する基本的な方法といえよう。

如上の『保元物語』研究史は古態性の追求が一つの軸となっている。一方、近年の『平家物語』研究では、最古態本と考えられてきた延慶本の古態性が相対化され、古態性の認定には徹底的な諸本比較が不可欠だという認識が定着している。本論文はこの動向に学び、『保元物語』の原作を見据えて諸本比較に徹し、理論上原作に最も近いとされる原態本文、及び主要三系統本文の生成（改編）に関わる現場の究明を試みるものである。

第一章では、『保元物語』の原作を見透かすために、その原態本文の生成期の歴史認識を考察した。ここで提起した問題は、従来の一般通念、すなわち保元の乱と平治の乱を「保元・平治の乱」のように一組の画期的事件として捉える認識が、本作の成立期に存在したのかということである。本章ではまず、この認識方法が軍記三作品と同時期に成立した『六代勝事記』『承久記』には確認できず、軍記三作品成立期の多様な歴史認識の型の一つに過ぎないことを指摘した。次に軍記三作品の共通点として、特に源平抗争の前哨戦として両乱を捉える点、及び両乱に跨がる因果応報の生涯を展開した信西（また源義朝）を素材とした認識方法である点を指摘した。さらに、平治の乱から承久の乱までの間に成立した『今鏡』『愚管抄』には軍記三作品通有の要素二点が見出せないことを明らかにした。以上のことから、軍記三作品は「保元・平治」という認識と呼称を初めて定着させ、後代の歴史認識のあり方に広汎な影響を与えた作品群だったと結論づけた。

第二章では、『保元物語』諸本中の最古写本、彰考館文庫蔵文保二年（一三二八）書写奥書本（文保本）の来歴と生成環境を究明した。該本は延宝八年（一六八〇）に二条寺主家（興福寺一乗院門跡坊官）憲乗より水戸史臣佐々宗淳に、長禄四年（一四六〇）書写奥書本『平家物語剣巻』（長禄本『剣巻』）と共に譲られた。さらに、該本には一丁表

内題下方に「光台寺継実」、奥書に「法花院」という識語が確認されるが、従来その意味するところは不明だった。本章では両寺院の名の載る資史料を調査し、まず「光台寺」が現奈良県奈良市池田町（廣大寺池南西）の唐招提寺系律宗寺院、次に「法花院」が現奈良市森本町の東大寺末寺だったことを明らかにした（いずれも廃寺）。すなわち、文保本は東大寺系列の「法花院」で編まれ、興福寺系列の「光台寺」へと伝来したのである。この検証の妥当性を裏付けるために、柿本寺（東大寺系列）で書写されたにもかかわらず、最終的に二条寺主家の許へ伝領された長祿本『剣巻』の事例を確認した。加えて、法花院・光台寺・柿本寺が地理的に近接することも指摘し、文保本が成立より彰考館に至るまで奈良県の一部地域を出なかった伝本であり、その成立には南都寺院社会の文芸活動が関わっていたという結論に至った。

第三章では、中世に最も流布したと目される宝徳本系統の成立について論じた。先行研究では、当該系統の前段階には鎌倉本との共通祖本（共通祖本Xとする）が想定され、その段階で宝徳本文の大部分は既にある程度達成されていると考えられていたものの、その具体的なあり方については深く踏み込まれていなかった。本章では諸本比較により、特に鎌倉本・宝徳本の共通記事を抽出してその実態を追究し、先行研究の見通しを追認した。すなわち、共通祖本Xは従来の本文の諸要素（特に崇徳と源氏の悲劇）を強調し、合戦の対立構図を明瞭化する傾向を有することを指摘した。また、為朝渡島譚を持たない宝徳本に、鎌倉本の為朝渡島譚の詞章が確認できることから、共通祖本Xには渡島譚が存在した点を明らかにした。そして、鎌倉本・宝徳本における戦乱後の崇徳詠歌記事には文保本の書き入れが前提となっていると考え、共通祖本Xの成立上限を文保二年（一一三八）とした。

第四章では、古活字本系統本文の最たる特徴である行誉『塏囊鈔』に依拠した増補に注目し、その引用方法を分析した。従来、この編者が様々な文献を閲覧できる環境にいたことは指摘されていたが、特に『塏囊鈔』を重視して登場人物三名（藤原頼長・源義朝・鳥羽院）への評論文を展開する意図は、必ずしも解明されていなかった。したがって、本章ではこの編者の意図を検討するために、『塏囊鈔』だけでなくその出典にも調査の手を広げ、また『保元物語』諸本の比較を通して古活字本の独自異文と右の評論群との関係性を考察した。その結果、古活字本本文編者が行誉の主張や『塏囊鈔』の典拠を知悉しており、それらの文献を座右に置きつつも『塏囊鈔』を優先して引用する点、『塏囊鈔』からの引用が一つの語句から複数の記事まで自在である点、『保元物語』先行本文の有する設定を無視してでも『塏囊鈔』記事を組み込む点等を明らかにした。以上の事実から、如上の編集が可能だった古活字本本文編者として、行誉かその周辺人物が最も相応しいのではないかと仮説を立てた。

第五章では、前章の結論のうち古活字本本文を行誉が編集した可能性を踏まえ、行誉の手に成る他作品を調査した。すなわち、嘉吉二年（一四四二）の書写奥書を有する天理大学附属天理図書館蔵本（天理本）『梅松論』は行誉の編集を経ており、しかも先行研究で指摘されているその編集方法は、古活字本『保元物語』のそれと共通する点が少なくない。本章では天理本『梅松論』の独自記事を二箇所抽出し、その典拠『神皇正統記』

の記事が古活字本『保元物語』に引かれた『塏囊鈔』記事と共通する点、また天理本『梅松論』と『塏囊鈔』よりうかがえる行營の関心のあり方が古活字本『保元物語』のそれとも共通する点を指摘し、古活字本『保元物語』が行營の編集に成る本文ではないかという前章の仮説を補強した。

第六章は『平家物語』の本文改編という観点から『保元物語』受容の一側面を考察した論で、全体の補説として位置づけられる。ここでは、延慶本『平家物語』第一末所載の崇徳関連話群における編集方法とその意図を考察した。この話群は他の軍記物語が『保元物語』（鎌倉本）を撰取した確実な事例だが、双方の本文にはそれぞれに矛盾する点が多く、かつては両者の先後関係が議論された。そして先後関係が明らかとなつてから、本文の不備について未解明だった延慶本の編集方法は分析されなくなったのである。したがって、本章では延慶本本文編者の編集方法を調査し、鎌倉本『保元物語』における蓮如訪問記事から肝腎の蓮如を捨象して、配所の崇徳の心情を述べるのに有用な文言のみを取り上げるという方法を指摘した。さらに、平康頼の訪問記事と西行の訪問記事でも同様に、延慶本祖本の文脈もしくは出典に登場した人物を削除するという方法が確認できる点、他方で延慶本には西行が崇徳供養のために西国へ訪問したと読める加筆がなされている点をも指摘した。こうしたことから、延慶本本文編者の意図は崇徳と西行の好誼を強調して慰霊する点にある、という結論に至った。

「おわりに」では、各章の要点を振り返り、今後の課題を提示した。すなわち、軍記三作品の原態本文を想定しながらその成立期の歴史認識を検討する必要性、南都の文芸活動と軍記物語の制作・管理に対する注意を払う必要性、鎌倉・南北朝期の本文を探るためには『平治物語』と『平家物語』の諸本を視野に入れて精査する必要性、古活字本本文の編纂過程を一層詳細に追求する必要性を指摘し、これらに取り組むことで、総体としての『保元物語』を把握できるだろうという見通しを述べた。

なお、本論文のうち、すでに公表されたものの初出刊行物は以下の通りである。但し、博士論文に再構成する際、それぞれ一部改訂した箇所がある。

- ・第一章 東京大学国語国文学会編『国語と国文学』九四―四号（二〇一七・四）
- ・第四章 全国大学国語国文学会編『文学・語学』二〇七号（二〇一三・一一）
- ・第五章 『太平記』国際研究集会編『太平記をとらえる 第一巻』（笠間書院 二〇一四・一一）
- ・第六章 大橋直義氏編『アジア遊学 211 根来寺と延慶本『平家物語』 紀州地域の寺院空間と書物・言説』（勉誠出版 二〇一七・六）